

## 永井荷風のゾライズム

つ げ て る ひこ  
 柘 植 光 彦

明治20年代から30年代初頭へかけてのゾラの移入は、吉田精一氏がくわしく述べている<sup>(1)</sup>ように、ゾラの名前が喧伝されていたにもかかわらず、長篇小説の翻訳の困難さのゆえに渋滞していた。また、ゾラの最初期の紹介者森鷗外が、ゾラへの否定的評価の持主であったという事情も見逃せない。むしろ、数ページといった超短篇の多いモーパッサンのほうが、先に翻訳・翻案される気運にあった。

ドレフェス大尉の不法逮捕事件は明治27年に起こっており、明治31・2年はゾラの最大の活躍期であって、32年9月9日再審の有罪判決、5日後の特赦放免という政府の妥協的処置によって一応の落ち着を見るにいたるのである。この5年間、フランス国民は二派に分れて一種の熱狂状態にあったのであり、日本でのゾラ受容開始期がこの事件の時期と重なりあっていたことも、ゾラの文学的本質の理解が遅れた原因の一つとなったであろう。ゾラ紹介の多くは、政治的行為とかかわりあった、いわばゾラの虚名を伝えたものだったのである。

永井荷風のゾラへの接近は、すでに美妙、紅葉、花袋がかなり積極的にゾラを受容していたという背景のもとに、木曜会の生田葵山、黒田湖山、西村渚山ら若手の西欧文学崇拜者、および小波、桜痴などの影響を受けて始まったものであった。英訳でゾラを読みはじめるまでの荷風のゾラ理解は、ドレフェス事件に大きく支配されたものであったと言ってよい。「ゾラが旧文芸に対するあの雄々しい反抗の態度が、非常に自分の性情に適し

たやうに思はれた」<sup>2)</sup>と荷風は書いている。

はじめてゾラの名が荷風の筆にされたのは、明治34年1月ごろ執筆の「桜の水」においてであった。これは、ゾラの名前をトルストイやツルゲーネフの名前とともに口にしながら黒田湖山らを揶揄した作品であって、荷風はこの時点ではいまだにゾラには傾倒していなかったと見るべきであろう。日常生活でも、荷風は午前9時までに歌舞伎座に出勤しなければならず、帰宅も門を乗り越えて家にはいらなければならないほど遅くなるが多かったのであるから、読書の時間もきわめて少なかったことと推察される。この期間には、原稿執筆もほとんどなかったのである。したがって、ゾラを読みはじめたのは、日出国新聞への入社後であろうと考えられる。ことに、「新梅ごよみ」の連載を中絶した5月末ごろからは、時間的余裕もでき、ゾラ熟読の準備も整ったであろう。

荷風は「社員陶沙」という名目で、同年9月には日出国新聞を解雇される。主筆福地桜痴の評判が芳しくなかったことから内紛が起こり、桜痴派の荷風もこれとともに追われたと見られる。注意すべきは、荷風が、この解雇ののちに、ふたたび歌舞伎座の作者に戻ろうと希望して叶えられなかったことである。歌舞伎座での実権はすでに竹柴派の手に移っており、桜痴門の荷風はここでも受け入れられなかったのである。翌36年には団菊両優の死という大事件が起こり、団十郎と手を組んでいた桜痴は完全に歌舞伎座から手がかりを失なうわけであり、この年の荷風は、桜痴の没落と運命をともにした感がある。

しかし、ある意味ではこれは幸いであった。荷風ははじめて遊芸と手を切り、文学に専念する決意を固めたのである。暁星の夜学にはいってフランス語を学びはじめたのはこの直後である。フランス語に近づいた動機としては、湖山、渚山らの鼻を明かすためには、彼らの知らないフランス語を武器とするのが最も早い、という考えもあったであろうし、すでに葵山に影響を与え、葵山経由で荷風に影響を与えたモーパッサンの短篇くらい

ならずすぐに読めるだろうという自信もあったであろう。フランスびいきだった桜痴からの影響も少なしとしない。しかし、ここで最も注目すべきは、荷風のそれまでの習作期の挫折が、柳浪や一葉、また歌舞伎や人情本など古い時代の文学を無批判に模倣したことに結びついていたという事情である。胸中にあふれていた“新しさ”への志向が、もはや趣向だけの新奇さでは通用しないという体験に裏打ちされて、必然的に海外文学を求めていったということがいえるであろう。

ゾラをめざしたことは荷風にとって好運であった。ゾラは翻訳・翻案が少なかったために<sup>13)</sup>“新しさ”をもっていたし、一方、そのナチュラリズムは硯友社の写実主義に手法上の共通点をもっていた。また他方では、準備されつつあった日本の資本主義社会の諸矛盾をとらえるべき新しい視点をも含んでいた。独学のゆえもあって自然科学・社会科学に対してはほとんど無知といってもよい荷風であったが、ゾラは荷風のその眼を一挙に社会にむかって開かせたのである。

荷風のゾラ通読の経路は明らかにはされていない。しかしその一部分ずつを拾ってゆくなれば、まず「豆子より」から、明治35年1月ごろ、「大地」《La Terre》、「恋の一ページ」《Une Page d'Amour》を読了したことが分る。もちろん英訳本である。また「ゾラ氏の故郷」からは、同3月までに「ナイス・ミクーラン」《Nais Micoulin》を読んだことが分り、「ゾラ氏の『傑作』を読む」からは、同5月までに「作品」《L'Oeuvre》を読んだことが分り、「ゾラ氏の作 La Bête Humaine」からは、同6月までに「獣人」を読んだことが知られる。

翌36年6月には「女優ナナ」《Nana》と「洪水」《L'Inondation》の訳出を行なっている。同月の「エミールゾラと其の小説」からは、それまでに読んだとほぼ断定できるものが、「ルールド」《Lourdes》、「ローマ」《Rome》、「パリ」《Paris》の三部作、また四部作の第一部「豊産」《Fécon-

dité), そして「居酒屋」《L'Assommoir》である。またここで一応ふれているので、読んだかもしれないと推定できるものは「ルーゴン家の運命」《La Fortune de Rougon》, 「饗宴」《La Curée》, 「ウージェーヌ・ルーゴン閣下」《Son Excellence Eugène Rougon》, 「貴女楽苑」《Au Bonheur des Dames》, 「パスカル博士」《Le Docteur Pascal》および「労働」《Travail》などである。また「地獄の花」跋文からは、35年9月以前に「実験小説論」《Le Roman Expérimental》を読んでいたことが知られる。

一方、荷風は E. A. Vizetelly の “With Zola in England” (Chatto & Windus, 1899) を愛読していた<sup>4)</sup> という。ヴィゼットリーはドレフェス事件で身に危険の迫ったゾラを、1898年7月から翌年6月まで英国の各都市にかくまいつづけた人物である。ほかに荷風が読んだ可能性のある英語のゾラ研究書としては、同じ書店の発行した R. H. Sherard “Emile Zola, A biographical and critical study, with a bibliography” (1893) が入手しやすかったと考えられるが、これは可能性にとどまる。

荷風が「野心」を刊行したのは、彼のゾラ受容の初期にあたる明治35年4月のことであった。しかしこの作品は、いまだ柳浪のお店騒動ものの域を脱しきれないものであった。主家の娘に恋する番頭の佐吉、うぶな娘みよ、佐吉とみよを結婚させて財産の半分を維持しようとするお霜などは、いずれも古い型の人間であり、一篇の結末を佐吉の怨恨にもってきた点も常套的である。しいて新しさを見出そうとすれば、箕島光太郎の野心とT M商会の新趣向、また平和な田園に生活を求める島田の存在があげられよう。

この作品に直接につながるゾラの小説は「貴女楽苑」である。主人公のオクターブ・ムーレは、百貨店「貴女楽苑」の前経営者の夫人であるカロリーヌと結婚したところ、カロリーヌが死んで全財産が彼の手に移りこ

み、そこから店舗の大拡張を始めるのである。これは「野心」の光太郎が父親の死で財産をすべて受けつぎ、その結果新しい事業を開始するのと類似点をもつ。またオクターブの異常なまでに野心的な性格と、人の意表をつくアイデアの実行などは、姿をかえて光太郎とその共同経営者豊里の性格や行動のなかにもちこまれている。

しかし、ゾラの百貨店が大成功し、オクターブの恋人ドニーズの努力によって店員の待遇までが改善されてゆくのに対して、荷風のTM商会は、まだ開店もしないうちに番頭佐吉の放火によって消滅してしまう。ここには荷風の悲惨小説時代の残滓を指摘できると同時に、こうした野心的な人物に対して荷風が終生抱きつづけた反感をも見ることができる。一方、社会との関連からいえば、封建的なものと資本主義的なものとの過渡的な闘争段階を描いたという特色を、かろうじてもっていたわけである。

吉田精一氏は、「貴女楽苑」と合わせて「ごった煮」《Pot-bouille》との関連を指摘し、また結末の放火の部分は「プラッサンの征服」《La Conquête de Plassant》の影響ではないかという。<sup>6)</sup>しかし、「ごった煮」は百貨店にはたしかに言及しているのではあるが、「野心」にはあまり多くを反映していないように思う。また荷風が「ごった煮」を読んでいたという確証はない。一方、「プラッサンの征服」の放火は、精神病院を脱走したフランソワが自宅に放火し、野心的な男フォージャを殺すという結末部分にあるので、たしかに「野心」との関連は推理されるのであるが、これも荷風が読んでいたという確証はない。いったい、放火はゾラが多くの作品に好んで書いたところであって、この点では花袋の作品にも影響を与えている。荷風が「大地」を読んでいたことは「豆子より」に明らかであるが、「大地」には二度にわたって放火場面が現われる。ことに二度目のものは、作男の怨恨による放火であって、「野心」の放火との類似が見られる。また荷風が読んだかもしれない「労働」にも放火が描かれている。

このように、この作品は、その新趣向においてゾラを模倣し、古い人間

関係の描出において柳浪の影響下にあるという、新旧雑居のグロテスクな雰囲気をもった、やはり習作の域にとどまる作品であるといえよう。また、“野心は熱病である”と考える文学青年島田は、のちの文明批評にも共通する荷風自身の考えをもった人物である。この人物の登場は、たしかに作品に彩りを添えてはいるが、一方では、ゾラに徹し切れなかった荷風の弱みをそこに見ることができよう。「帝国文学」明治35年6月号の「野心」評が、光太郎と島田の性格描写のみを賞め、他の人物については難じている点も、また当然といえよう。一方はゾラのオクターブ、他方は荷風自身、そしてその他は柳浪流——というよりも通俗文学流の類型的人物にすぎなかったからである。文章も、ところどころに直訳調をまじえ、また感嘆符つきの詠嘆を添えて、新しさを強調しようとしているが、これがかえって古風な人物関係から浮き上がって奇妙な印象を与えており、決して成功した文体であるとはいえない。

この「野心」にくらべると、明治35年6月発表の「闇の叫び」は、文章が落ち着き、また詠嘆をかなり減らした説明的な叙述をとって、あきらかに文体上での相違が見られる。

またテーマも、はっきりと貧困の害悪という一点にしばられてきている。主人公の鞍間秀輔は、自分が主筆をしている新聞の売れ行きのためには手段を選ばないという野心的な人物であるにはちがいないが、決して「野心」の光太郎のように誇張されすぎではない。荷風が日出国新聞社時代に親しく見聞したであろうような、どこにでもいそうな編集者であるにすぎない。また、金のために工場経営者に身を売り、妊娠したあげく免職されて、売春婦に転落しようとしている女工のお袖も、東京のどこの路地裏にもいそうな娘である。

荷風のゾラ消化は、明らかに前作よりも進んでいる。これは荷風が、ゾラの個々の作品を模倣しようとはせずに、社会の暗黒面を日本の現実の中から自分なりに拾い集めるといふ、ゾラのモチーフを追う態度に立ちはじめ

たからである。もちろんそこには、社会構造の本質に迫るという姿勢はもとよりなく、貧困の悪の描出とならんで、新聞記者の正義と売名行為の矛盾が、外科医のメスの論理などとともに詳しく描かれるために、かえって焦点がそれてしまうという欠点もあるのだけれども、少なくとも、ゾラを本質的に理解しようとする願望が感じられることは確かである。このことと、文体に意識的な変革が見られる点、また暗い筋立てと結末をもっている点とを合わせて考えるならば、この「闇の叫び」は、「野心」と「地獄の花」とを直線的につなぐ系譜上にある作品であったといえるであろう。

次に、荷風による一連のゾラ紹介文を見てゆきたい。まず明治35年4月発表の「ゾラ氏の故郷」は、「ナイス・ミクーラン」の一節を抄訳したものであった。注意すべきは、この最初の抄訳が、南仏の風景描写の部分だけを取り上げている点である。（もちろんこれは英訳本からの重訳である。）荷風がこの時期において、ゾラの風景描写に関心をもち、ゾラの実生命ともいえる人物の性格や行動の緻密な描写に多くの関心を抱いてはいなかったということは、荷風がのちに、ゾラの本質とは無関係な方向へ容易に脱出することにつながってゆくのである。

「ゾラ氏の『傑作』を読む」は同年6月の発表であった。この文で注意すべきは、荷風が「作品」を実に正確に読み、その梗概もうまく筋を追っていることである。ただし「作品」のはじめの部分の、クロードが、胸をはだけて眠っているクリスティーヌを夢中で写生するくだりや、ついにモデルになることを決意したクリスティーヌが黙って服を脱ぎ捨ててゆく場面など、感動を呼ぶいくつかの場面にふれずに、いきなり巻の半ばに近い展覧会落選のあたりから梗概の叙述が始まる点は腑に落ちない。篇中の作家サンドスがクロードに語る芸術論などが長々と引用されているところを見ると、荷風は「作品」を、ゾラの芸術論を知るための資料として読んだのでもあろうか。そして、またも荷風がゾラの記事を賞めるのは、街とセ

一ヌの叙景だけである。荷風が、ゾラの冷静精密な細部描写にあまり関心をもたず、その小説理論と風景描写に注意をそそいでいることは、ここからも見てとれるのである。

「ゾラ氏の作 *La Bête Humaine*」は、翌7月の発表である。翌年には荷風はこれを「恋と刃」と題して訳出するのである。「獣人」はゾラの商品中でも、最も残忍な性格の狂人を主人公とし、配するに殺人犯、不貞の妻、守銭奴の老人と老婆、列車を転覆させる無知な田舎娘など、いずれも歪んだ性格の所有者ばかりをもってし、芸術的な香りに乏しいばかりでなく、探偵小説めいた筋書によって通俗に墮した劣作であった。この小説が翌36年に、あたかもゾラの代表作であるかのごとくに、大阪毎日新聞に荷風の筆で抄訳掲載<sup>(6)</sup>されたことによって、日本の前期自然主義の受けた歪みは小さくないと思われるのであるが、ここで荷風がこの小説に感服したのは、柳浪からの影響がいまだに大きかったことを物語るものである。荷風は「獣人」を、「永遠に崇拜すべき価値ありと信ず」としているのである。

ところで、明治34年5月の花袋「野の花」序文には、モーパッサンの「ベラミ」やフローベールの「感情教育」の名があげられ、これらの作品は不健全ではあるが、「作者の些細な主観が雑って居ない為めに、何処かに大自然の面影が見えて人生の帰趣が着々として指さされる」とし、だから作家は、人生の秘密も悪魔の私語ももっと勝手に書いてほしい、と漸進的な意見が述べられていた。同年12月の天外「はやり唄」序は、「自然は自然である」として、自然界の現象に感触するような描写を説いており、一見ゾラとの関連を連想させない大局論であった。これに対して「**地獄の花**」跋文の与えた効果は、その本が小さく薄かったのとは対照的に大きく、また強烈であった。

といっても、この跋文は、ゾラへの部分的共感を、単に仰々しい文章で



つづったものにすぎない。それは、遺伝と環境に伴う人間の暗黒な動物的な面を忌憚なく描写するつもりであるという一方的な宣言にほかならなかった。「実験小説論」第一章の観察から認識にいたる実験的過程という小説制作の意義，第二章の社会的環境と現象との関係，第三章の決定論の意味など，ゾラの結論にいたる立脚点には眼を閉じて，その題材面に関する結論部分だけを，性急に，無批判的に書き並べたものにすぎない。しかもこれを実作に反映させるには，まだ荷風の人生経験は浅すぎた。ときに満22歳にすぎなかったのである。

「地獄の花」へのゾラの影響としては，まず主人公常浜園子のなかに，「貴女楽苑」のヒロインであるドニーズの面影を見たいと思う。ドニーズは善良で賢明で，しかも積極的に環境の改善を図る娘であって，この点では善良であるがゆえに環境と闘わなければならない園子と同じ位置におかれているといえる。またもしも荷風が「生きるよろこび」《La Joie de Vivre》をすでに読んでいたとしたら，そのヒロインであるポーリーヌの投影もあったかもしれない。

また黒淵富子は，「饗宴」のルネや「女優ナナ」のナナに近い自由で奔放な女である。富子は，母の縞子からの遺伝でこの多情な性格をもっているわけなのであって，この点もルネやナナに共通する。

一方，ゾラ作品に多い無理心中が，ここでは黒淵長義と縞子の無理心中として現われる。また，キリスト教徒への強い反感もゾラの影響によるものであろう。ここでは，英人宣教師の妾と通訳との密通，クリスチャン笹村道三の姦通などが描かれている。

もちろん，荷風本来の傾向として，女性への同情心，上流階級・教育者・道徳家への反感などがあり，一方，姦通や無理心中は柳浪の作品中にも多く現われるのであるから，これらがすべてゾラに発すると言うことはできない。ただ，荷風が，自分の甲羅に似せてゾラを切り取ってきているということはいえるであろう。そうしてこうしたモンタージュによって，荷

風が自分で強調している「暗黒」の雰囲気がかろうじて成立しているのである。

このようにゾラの影響は、人物の設定、攻撃目標などにしばしば見られるのであるが、荷風は、柳浪模倣期において柳浪に迫りえなかったのと同じように、その生来の傾向によって、強烈な性格の人物を描くことができず、主人公を突き放すこともできない。15年ののちに「腕くらべ」の駒代に与えたのと同じような、金銭的な面での救いを、常浜園子に与えるのである。園子が、富子と同じ境遇を自ら選ぶという結末部分に、逃避の積極性が感じられて目新しいだけであって、一篇はほとんど一人の薄倅の女性の物語に終始しており、作家自身がそこに没入して同情をそそぐという創作方法が、しばしば現われる詠嘆調<sup>(7)</sup>とともに、ゾラとは程遠い稚さを見せている。

むしろゾラとは無縁な部分で、この小説には評価すべき点がある。それは、全篇にちりばめられた季節感ゆたかな風物描写である。ここには、それまでの荷風の作品中には見られなかった鮮やかさとみずみずしさがあふれている。地の文の大きな部分を季節感の描出に費すという荷風の傾向は、この小説で確立されたと見てよい。このことは荷風の“写実主義”の評価とも関わりあうのであるが、荷風は季節感のあふれる風物を描くことが地の文における最も写実的な描法であると信じていたのであって、そうであるからこそ、荷風は自分のゾラ志向とのあいだに矛盾を感じないまま、こうした風物描写を行なうことができたのである。この描法がこの小説で確立したという背景には、生来の敏感な体質、絵画を好んだこと、などのほかに、木曜会での俳句の影響をあげたい。

「地獄の花」の翌月に発表された「**新任知事**」については、成瀬正勝氏のモデル論<sup>(8)</sup>がある。これによれば主人公並河泰助のモデルは、荷風の父永井久一郎の三弟阪本鈺之助であり、この作品は、鈺之助の福井県知事就

任にヒントを得たものであるという。とすれば、並河泰助の弟富岡武三は大島久満次であり、家を継いだ長男重太郎は永井正履であることになる。

こうした素材のあるせいか、この作品の中心である並河泰助・縫子夫婦の像には、奇妙に現実的な、粘着力のようなものがある。また、その心境描写には、荷風作品にはめずらしい緊迫感があるといえる。特に、並河縫子のように名誉欲に取り憑かれた女は、それまでの荷風作品には現われなかった。荷風は女性の人物にはつねに甘かったのであるが、ここでは縫子を徹底して突き放して描いたために、作品の迫真力を増したのである。

この作品での“社会の暗黒面”が、高級官僚の出世欲と猟官運動に集中されていることは、作品の焦点を散らすことなく、まとまりあるものにした。ただし、これは荷風につねに付きまとう欠点であるが、この主題に対応して描かれるべき社会機構の問題点がまったくとらえられていないために、泰助夫婦の欲望は、子供じみた底の浅いものになってしまった。この間違いじみた出世欲を、単に兄弟夫婦の対立という設定だけから説明しようとしたために、対象を一面的にしかとらえることができなかったのである。

一方、泰助と縫子が、知事就任直後にあいついで結核のために死んでしまうという結末も、荷風流の甘さの排除された巧みな大団円である。そして全体としてもこの作品は、読みおえたあとにまで胸の中にこびりついてくるような、粘着力のある一種のリアリティをもっている。荷風が日頃からもっていた官僚への反感が、阪本鈺之助という特定の対象にむかって投げつけられたという、つくりものでない感慨のゆえであろう。ゾラの野心的主人公たちと並河泰助とが親戚関係にあることは事実であるが、ここではそれを強調する必要を感じないのである。

荷風は小遣い銭かせぎのために、同年9月、井上啞々との共著で「**暗面奇観 夜の女界**」という本を出している。荷風筆と断定できるものを見てゆくと、まず「小引」の文章は、「地獄の花」跋文と補い合う関係にある。

“人間が動物的欲情を絶やすことはありえない”とあることから、「地獄の花」跋文の「動物的」という語が、荷風においては「欲情」の語と密接な関連をもつことが理解されるのである。

短章のうち「一、遊廓」には、そこを悲惨な地獄であるとする見方が顕著である。「六、後家の住居」は後家の生活をさらりと書き流しているが、「罪悪」の語も見える。「七、夜の銘酒屋」は下等な売春婦のある夜を対話風に書き、「瀬東綺譚」の一節を早くも想像させる。「九、遊女の最期」は病死する遊女たちの悲惨さを詠嘆調につづる。「十、待合と芸者」は三人組の芸者遊びを書き、「忌むべき罪」としている。「十二、若い衆と師匠」は旧作「青簾」の改作であって、これは洒落た好短篇になっている。「十三、海外の醜業婦」は以前の上海での見聞を悲惨小説風に嘆じたもの。

「十五、女役者」は歌舞伎座での実際の見聞を女優の世界に移した花札賭博の光景である。

これら一連の短篇は、当時の荷風のゾラ傾倒を如実に伝えている。また荷風が「女界」のあらゆる部分にゾラ流の「暗黒」を発見しているという独自の嗜好も読みとれるのである。次作の「夢の女」が、ゾライズムと遊廓とを結びつけた作品となることは、これらの短篇の執筆と大きな関係があったと思われる。

「夢の女」は、翌明治36年5月に刊行された。吉田精一氏はこの小説に「居酒屋」との類似を見ている<sup>(9)</sup>が、このことは、たとえば、零落の女をヒロインとするという全篇の趣向に見られ、ジェルベーズとお浪、ナナとお絹の部分的な類似点にも見られる。お絹の家出もナナの家出も共通しているし、お絹の描写にはナナの描写と酷似している部分<sup>(10)</sup>がある。

しかしながら、「夢の女」が一応読むに足る作品となった理由は、これらゾラの直接的な影響によるというよりは、むしろ荷風の得意とする遊女物だったからであろう。荷風が生来もちつづけてきた女性への同情という

モチーフが、ここでは、これまでの習作の成功した部分を踏まえて無理な背のびを避けるという、技術面での安定感に支えられて、ある程度の結実を見たのである。

お浪が岡崎で生まれて名古屋で働く女である点は、荷風の故郷追慕に関係があるであろう。名古屋で主人に手ごめにされ、妾として東京に出てくる点には、「夕せみ」のお園の後身としての位置を見る。金のために家の犠牲になる点は、荷風作品では「おぼろ夜」の駒次、「薄衣」のお袖、「闇の夜」のお為、「小夜千鳥」のお玉、と柳浪模倣期のヒロインたちに共通して見られる。お浪が娘のお種を懸命に育てようとするところは、荷風がそれまでに子持女を書いたことがなかったところから、「居酒屋」との関連を指摘できるかもしれない。お浪が上郷利兵衛の妾となってから引取る妹のお絹は、明らかに「濁りそめ」のお糸や「薄衣」のお小夜につながる誘惑されやすい娘である。一方、お浪の父である山口義之進は、零落した元岡崎藩士であって、これは荷風が親しく見聞した父久一郎の周辺の没落士族にヒントを得たのであろう。

お浪の性格は、つねに家族の犠牲に供される哀れで善良な女の一典型として、あくまでも荷風独自の好みからつくりだされたものであった。その払った犠牲の大きさにおいて「地獄の花」の園子などの比ではないのに、その苦悩は園子の鋭い苦痛の念のように自覚されたものではない。お浪は日本のいたるところに実在していた忍従の女なのである。

荷風の小説がきわだった成功をおさめるのがつねに花柳界の女を描いた場合に限られるというその後の傾向の、最初の兆候をこの「夢の女」に見ることができる。荷風の主人公は、決してゾラのヒロインたちではなく、むしろ樋口一葉の主人公たちに代表されるような、忍従する日本の女たちでなければならなかった。柳浪の陰惨な世界への接近の限界が「花ちる夜」によって示されたのと同じように、「夢の女」は、ゾラへの接近の限界を示す作品だったのである。

同年7月には「**夜の心**」が発表された。女学生を描いた点が、しいていえば新趣向であろう。美しく活動的な娘福田幾枝は、一面ではナナであり、最後に彼女が東助と結婚しても玉塚とは情人として関係をつづけようと決心するあたりは、ナナの母ジェルベーズをも思わせる。

しかし、幾枝が叔母の恩に感じて結婚を決意するあたりには、やはり古さを感じられる。幾枝は、「地獄の花」の園子が自ら自由な女の境涯を選んだのとは異なって、あくまでも義理と人情を両立させてゆこうとするのである。ただ、荷風の努力を認めようとするならば、こうした当世風な女学生をつくりだそうとした点と、こんな純真そうな女学生でも“社会の暗黒”から逃れることはできないということを示そうとした点をあげるべきであろう。

同じ7月に発表された「**燈火の巷**」は、瀬沼茂樹氏も指摘している<sup>(11)</sup>ように、「野心」と密接な関係をもつ作品である。鶴元亀太郎は、「野心」の簗島光太郎が成功したのちの姿とも言うべく、また画家の中谷は、「野心」の島田の安定した姿と見ることができる。竜太郎は、洋行ののち、父親の経営する銀行の役員になっているのであって、本来なら日の出の勢いの若手実業家という境遇である。しかし、竜太郎は心中では画家中谷の悠々自適の生活をうらやんでいる。いうならば竜太郎は、野心の無意味さを知ったのちの光太郎とでもいうべき人物なのである。一方、中谷は、荷風の心の一端にあった願望を体現している芸術家なのであって、竜太郎とともに、荷風の一分身である。

この竜太郎が、自分より若くて世間知らずで従順な、美しい継母杵子と、夜の町を手をとりあって散歩するという、不倫の恋の予感を書いて未完となっている。

この作品では、むしろサイデンステッカー氏のいう荷風の“Zola fever”<sup>(12)</sup>が急速に冷めてきていることが感じられる。たとえば三人の主人公である竜太郎・杵子・中谷は、いずれも荷風が好感をもっている人物である点が

そうであろう。あまりにもゾラを写すのに急であったことの反動から、背のびしないで気楽な小説を書こうと試みたところ、これが荷風の資質を呼びおこしてすぐれた作品になりかけた、というのが実の所であろう。

もちろん、竜太郎と杵子のあいだに芽生えた好意が、やがて二人を破滅させるような恋に成長するであろうということは、十分に予測できる。一面では母性思慕につながり、一面では暗い不倫の関係への嗜好の察せられるこの作品は、発展してゆけば、漱石の小説の世界を先取していたかもしれない。少なくとも、ゾライズムとは異質な小説空間を導きだしたであろう。この一篇は、実に特異な性格をもっているのである。

同じ年に行なわれた荷風のゾラ作品の翻訳について見てゆくと、まず「恋と刃」は、かなりのエピソードを捨ててはいるが、わりあいに忠実な「獣人」の訳であった。一方、「女優ナナ」は「ナナ」の抄訳であり、重要な人物はすべて登場させているが、テレビ・ドラマのような短い演技に終わってしまい、ゾラの緻密で迫力のある描写はまったく影をひそめてしまっている。終章だけが、この作品の時代的・社会的背景を表わすものとしてくわしく訳出されている。このように描写をあまり重く見なかった点は荷風のゾラ移入の最大の難点であろう。一方、「洪水」はほぼ逐語訳であり、ゾラを最も正当に伝えている。これは、「洪水」が短篇であったことによるものであろう。

荷風は、この明治36年9月に、アメリカにむかって出発する。そして5年後に帰国してからは、耽美的な作家として立つことになる。すでにこの年10月に発表された「すみだ川」（これは6年後の同名の作品とは異なる）には、その将来が暗示されていたとすることができる。

大川の屋形船の上で、年増芸者が若旦那との恋の思い出を語るという、人情本の世界を思わせる趣向であり、二年前の「新梅ごよみ」よりもはるかに巧みである。無理な筋の運びもないし、柳浪に発する異常な人物など

も現れてこない。このような作品を、積極的なゾラ受容のなかで荷風が書きえたということは、荷風が結局のところゾライズムを単なる新趣向としてしか見ていなかったからではないだろうか。というよりも、その程度にしか理解できなかったのではなかろうか。

荷風はゾラの小説理論のなかに、賛同できるいくつかの部分を見出した。それは新文学の旗印とするのに最適な、武装した理論であった。もちろんそれは、日露戦争を目前にした日本の社会の矛盾をえぐりだす上に、最もふさわしいと感じられるものであったであろう。ゾラに顕著に見られる弱者への同情心や権力への反発も、荷風にとって容易に受け入れることのできるものであった。ゾラの作中にしばしば現われる極端に異常な人物たちも、柳浪の系譜にあった荷風にとっては、親しみやすいものであった。

しかし、荷風に学べなかったものは、ゾラの綿密な取材をとまなう創作態度や、緻密な描写力ばかりではなく、まず第一に、ゾラの一貫して見られる歴史性であった。ゾラは、つねに、戦争や革命などの大事件を踏まえ、十九世紀のフランス市民社会を歴史的視野のなかに見つめながら、そこにうごめく多くの個人たちを描いたのであった。これに対して、荷風がとりあげた“社会”とは、自分がそこに所属していないところの、漠然とした上流階級であり、教育界であり、新聞社であり、花柳界であるにすぎなかった。それらを攻撃する武器として、荷風は「実験小説論」の数行を借りたのである。当時もてはやされていたゾラに対する、素朴なヒロイズム志向もあったであろう。

このように荷風のゾラ受容は、荷風の一生をも予言するかたちで行なわれたのである。荷風は、豊かな語学力と、江戸芸術に対する博識をもちながら、自然科学・社会科学はもとより、哲学・思想・宗教方面の教養をまったくもっていないという特異な人物であった。荷風はいわば一生にわたって文学の職人であった。荷風のゾライズムとは、そのせまい視野のなかで自分の好みに合わせて切り取った、一つの新しい“技術”にすぎなかつ



たといえるであろう。

### 注

- (1) 「自然主義の研究」第二章第一節「フランス自然主義の移入と紹介」
- (2) 「我が思想の変遷」(岩波版荷風全集第27巻)
- (3) 十八公子訳「大洪水」(明治25年・国民新聞), 宮崎湖処子訳「牧園」(明治25年・国民新聞), 木内愛溪訳「わが死」(明治26年・此花草紙), 松居松葉訳「大洪水」(明治29年・文芸倶楽部)——これ以外にめだつた訳はない。
- (4) 岩波版荷風全集第18巻後記
- (5) 「自然主義の研究」上巻195ページ
- (6) 同年11月には単行本として新声社から刊行された。
- (7) のちに荷風はみずからこれを削除している。野村喬「『地獄の花』をめぐって」(国語と国文学・昭和30年9月号)および「荷風と『地獄の花』」(解釈と鑑賞・昭和31年3月号)参照。
- (8) 「荷風と『やつし』」(明治大正文学研究10号)
- (9) 「自然主義の研究」上巻198ページ
- (10) 「ナナはだんだん成長して大人になった。十五歳で彼女は仔牛のように肥え、……そのふとった肩は完全なまるみを帯び、一人前の女の成熟した匂いがするのだった。……乳房が張ってきた。真新しい白い繻子のような一對の乳房が」(田辺貞之助・河内清訳「居酒屋」から)
 

「お絹は最う十六になったのである……一二年前からは目に見る如く、丁度手鞠の様に円々と肥って来た処から粧はれた衣服の上からでも、人は容易く此の処女の飽まで豊なる肉付を見る事が出来るであらう。……殊に黒繻子の衿を押開る様に其の半衿の間から現はれた胸元の美しさは、一層引立って見えた」(「夢の女」から)
- (11) 岩波版荷風全集月報第19号
- (12) “Kafū the Scribbler” (Stanford University Press), p. 14.